

通級指導部研究の概要

1 研究テーマ

「自己を見詰める通級の授業づくり」

—自分の強みと苦手さを知り

自分に合った学び方で問題を解決することを目指して—

2 研究テーマ設定の理由

近年、通常の学級に在籍する子供のうち、学習面や行動面で困難さを示す子供の割合は増加傾向にある。中でも学習面に困難を示す子供は、自身の認知面の強みを生かしたり、苦手さを補ったりする学び方で学習に取り組めていないことが多い。そのため、学習上の困難さから自分の思う結果が得られなかったり、学習上の困難を乗り越えられなかったりする経験が積み重なることで、学習に対する苦手意識や学習そのものへの意欲の低下を強めていることが懸念される。

こうした中、通級による指導での自立活動においては、自分に合った学び方の習得が進んでいるものの、在籍校で十分に活用されていない現状がある。その要因の一つとして、子供自身が学び方の良さを十分に理解できていないことが考えられる。

そこで当教室では、子供が自らの強みや苦手さを意識しながら、様々な学び方を試し、自分に合った学び方の有効性を確かめていくことを重視している。そしてこれを「自己を見詰める」と捉え、通級の授業づくりの中心に据えることで、子供が学び方の良さを理解し、在籍校で活用しようとする意欲を高め、困難の改善・克服につながると考えた。

「強み」とは、

- 心理検査等で把握した子供の優位な力
- 行動観察等で把握した子供が
習得していることや得意としていること

「苦手さ」とは、

- 心理検査等で把握した子供の優位でない力
- 行動観察等から把握した子供が
習得過程にあることや得意ではないこと

3 通級の授業づくりと総論のつながり

通級指導においては、総論の「関心（好奇心と目的意識）」を図1のように整理した。

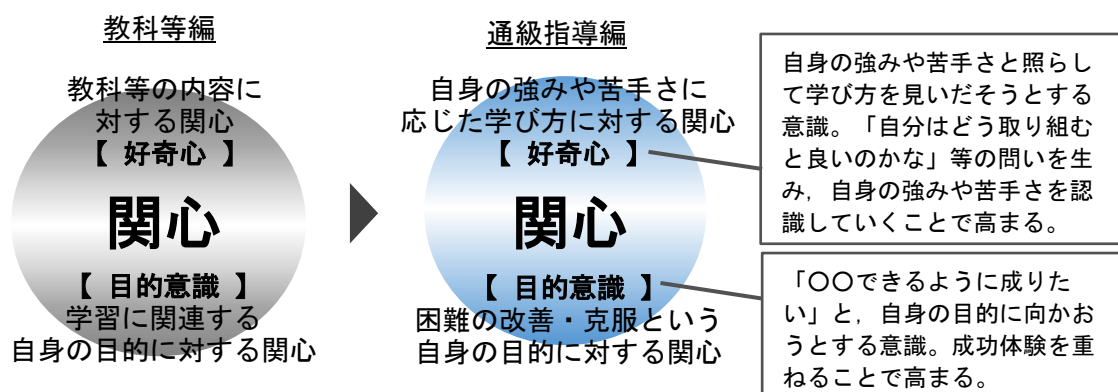


図1 通級指導における「関心」の意味

まず、教科別の指導における「好奇心」とは、教科等の内容に対する関心を指す。これに対して、通級においては、自立活動が教科に当たり、自立活動の中心的な目的は、障害による困難を改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことにある。このことから、通級における「好奇心」とは、「自身の強みや苦手さに応じた学び方を身に付けたい」という自身の学び方に対する関心である。子供が自分に合った学び方を試し、確かめようとする姿勢が、好奇心を持って学びに向かう姿である。

次に、教科別の指導における「目的意識」とは、学習に関連する自身の目的に対する関心を指す。これに対して、通級においては、困難の改善・克服という自身の目的に対する関心であり、「もっと学習が分かるように成りたい」「学校生活を過ごしやすくしたい」といった、自身の目的に向かおうとする意識である。目の前の課題に取り組みながら、その先の学習や生活を前向きに進めていこうとする姿勢が、目的意識を持って学びに向かう姿である。

このように、通級における「関心」は、「自身の強みや苦手さに合った学び方を獲得したい」という好奇心と、「困難を改善・克服し、学習や生活をより良くしたい」という目的意識の両面から成り立っている。図2に示したように、この関心が「どう取り組むと良いのかな」という問いを生み、「こうすればできるかもしれない」という見通しを経て、問題を解決できた喜びが循環することで、「このやり方でできる」という自分に合った学び方を見いだし、問題解決に向けて活用することができるようになる。

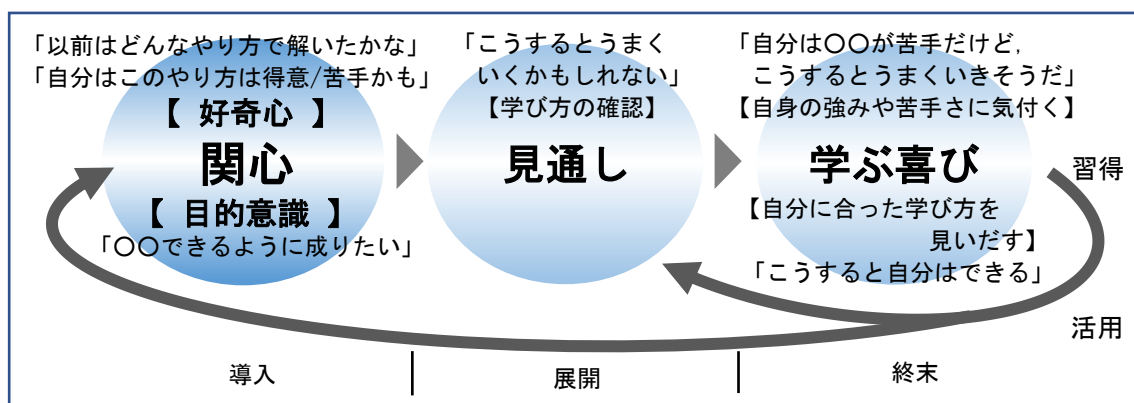


図2 自分に合った学び方の確かな習得・活用に至る循環構造

4 昨年度の成果と課題

昨年度は、「自分の取組方を見詰める通級の授業づくり」をテーマに、在籍校で解決できなかった問題（在籍校課題）に対する様々な取組方を繰り返し試し、「今までのやり方のほかに、自分に合った取組方があるか」「通級で提示された取組方は自分に合っているか」を考えることに重点を置いた。

その成果として、様々な取組方を試す中で、自分に合った取組方を見いだし、活用する姿が見られた。また、在籍校の学習場面でも、通級で学んだ取組方を用いて問題を解決しようとする姿が見られ、学びを在籍校に生かそうとする基盤が築かれた。

一方で、取組方を活用する過程において、自身の強みや苦手さとの関係を意識する姿は一定程度見られたものの、取組方を学ぶ意図や意義を十分に自覚するまでには至らなかった。そのため、類似問題の場面では取組方を活用できるものの、新たな場面に柔軟に対応することが難しかった。

この成果と課題から、自分に合った学び方を確かに習得し、より広い場面で活用していくためには、問題解決に取り組む際に、自身の強みや苦手さと照らし合わせながら取組方を吟味し、納得して選ぶ過程をさらに重視する必要があると考えた。

そこで、今年度は、「様々な取組方を試し、自分に合っているかを考え、繰り返し活用する」取組を継続しつつ、取組方の意図と意義を丁寧に共有し、やり取りを通して、自身の強みと苦手さを理解し、自分に合った学び方で問題解決に向かう姿の育成を目指すこととした。

5 関心を持って学び続けるための支援

(1) 好奇心・目的意識を持てるようにするための手立て

「この問題はできそう」と問題に対する好奇心を持てるように、在籍校で取り組んだことがあり、自信を持って解ける問題を提示する。複数回の解決を通して、「自分の学び方」に関心が向いてきた段階で、「あの問題は良かったけれど、この問題は苦手だな」「どう取り組むといいのかな」と問いを生むような、難度を調整した問題を提示する。

また、「できるように成りたい」という目的意識は、当初から明確に備わっているとは限らず、担当とのやり取りや小さな成功体験を通して確かにされていくものである。そのため、これまでの取組の成果や手応えのあった取組方を確認したり、困難の改善・克服に向かおうとする姿勢に対して励ましの言葉を掛けたりすることが重要である。さらに、通級での学びを在籍校で生かせるよう、在籍校で一人では解決できなかった問題を取り上げ、通級で習得した取組方から「このやり方ならできるかもしれない」という関心（好奇心）を引き出す。

(2) 見通しを持てるようにするための手立て

「こうするとうまくいくかもしれない」と自身の学び方に見通しを持てるように、担当は、提示した問題に対して、どのように取り組むと良いかを聞き取り、取組方の言語化や動作化を促した上で、取組の様子を見守る。このとき、問題に取り組む中で子供がつまづいた場合には、やり取りを通して具体的なつまづきの箇所を捉え、アセスメントや行動観察に基づき、子供の実態に応じた取組方を提案する。その際、「このやり方でやってみよう」と子供が見通しを持って取り組めるように、手順と一緒に確認する。そして、どのように取り組むかを子供に問い掛け、必ず子供自身に言語化や動作化を促す。これらの過程を経てから、問題に取り組む時間を確保し、担当は子供の様子を見守る。

(3) 学ぶ喜びに気付けるようにするための手立て

「このやり方でできた」という学ぶ喜びを感じられるように、問題を終えた直後に成果と課題を振り返り、自身の強みと苦手さに気付けるようにする。その際、「なぜできたのか」を問い掛け、学び方の言語化や動作化を促す。その上で、試した学び方の有効だった点（強み）や、これまでうまくいかなかった理由（苦手さ）を伝える。このとき、担当は取組の様子を再現するなど、子供が具体的に振り返ることができるようにする。なお、高学年では、学び方の言語化や動作化に加え、その有効性について自分の言葉で説明する中で、強みや苦手さについて確認していく。このとき、「ここは難しかったけれど、この取組方でできたね」「在籍校でもこの取組方が生かせそうだね」と学び方に対する価値付けを行うことで、「自分にはこのやり方が合っているかもしれない」と子供自身が学び方の良さを理解し、活用しようとする循環が生まれる。

こうしたやり取りの後に、再び「好奇心」を喚起するような問題を提示し、学び方の実践と振り返りを繰り返す。この「試行⇒振り返り」の構成を重ねることで、試した学び方が自分に合っていると

いう確信が徐々に高まり、自分に合った学び方を習得し、在籍校の学習や生活に生かそうとする意欲へとつながる。さらに、見いだした学び方を他の場面で活用することで、苦手さを補う強みを再確認し、「もっとできるように成りたい」という目的意識の高まりにもつながる。

6 在籍校との連携

本人が自分に合った学び方で力を存分に発揮できるようにするためには、在籍校との連携が不可欠である。

そこで、担当は、子供が通級で見いだした自分に合った学び方について、担任や授業担当者が具体的に把握することができるよう、通級・学校・家庭の三者が取組の様子を記入する連絡ファイルを活用する。また、よりタイムリーに共有できるように、Google Chat などのチャットアプリケーションを用いて情報共有を行う。

さらに、通級担当は、学期に一度は在籍校を訪問し、授業での取組の様子を参観する。その上で、子供が通級での学びを在籍校で生かせるよう、「自分に合った学び方で学習して良い」と思える環境作りについて、担任や学校への理解と協力を依頼する。

このように、通級担当と担任が連携することで、子供は「在籍校でも自分に合った学び方で取り組める」と自信を持って学習に臨むことができる。その結果、学習への意欲の高まりとともに、困難の改善・克服に向けた前向きな姿勢が育まれると考える。

以上のように、在籍校と継続的に連携しつつ、毎時間の通級指導の中で繰り返し手立てを講じていく。学び方は一定期間を通じて見いだされるものと捉え、様々な取組方を試しながら、自身の強みや苦手さと照らし合わせて自分に合う学び方を確かめ、問題解決に向かう姿を引き出していく。

(文責 戸石 祐子)